

関係認識をもたせる問題解決的な小学校社会科学習

—「時代の岐路となる事件」に視点をあて、
人物の行動理由に着目した実践を通して—

宮田 延実

愛知みずほ大学（非常勤講師）

本研究の目的は、児童が歴史的事象を多面的に捉えるための問題解決的な学習のあり方を検討することである。そこで、授業では、様々な歴史的事象の中から「時代の岐路となる事件」を取り上げ、それに関わった人物の行動理由を理解できるようにした。その結果、この事件に関わった人物の行動について考えたり予想したりする上で、行動理由は根拠となり、問題解決場面では有効な手立てとなった。また、複数の人物の立場でこの事件を考えることにより、児童はそれぞれの人物が互いに関わりながら歴史が造られたといった認識をもつことができた。これらの手立ては児童に関係認識をもたせるのに有効であることが明らかとなった。

キーワード：問題解決的な学習、歴史学習、小学校、関係認識

1. はじめに

社会科学習では、社会的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることが期待されている（文部科学省、2008）。そのため、教育課程企画特別部会の「論点整理」（文部科学省、2016）では、社会との関わりを意識した課題解決的な学習活動の充実等を求めている。

課題解決的な学習活動とは、「論点整理」によると、問題発見・解決のプロセスの中で、必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に加えて、それらを活用しながら問題を解決していく学習活動のことである。この課題解決的な学習活動は、問題解決的な学習として、1997年の中央教育審議会答申以降、特に社会科では重視されるようになり、2008年の学習指導要領でも「社会科の授業では、作業的、体験的な問題解決的な学習などを一層充実させること」と改定の趣旨を示している（文部科学省、2008）。そして、今次改定に向けた「論点整理」では「資料から読み取った情報を基にして社会的事象について考察し表

現すること等については、更なる充実が求められるところである」と示されていることから、問題解決的な学習活動が十分ではなかったことが読み取れる。つまり、問題を解決するには、考える基になる情報が必要であり、その情報や情報の活用が問題解決的な学習の成否に関係すると考えられる。

宮原（2006）は、科学主義の行為的な問題解決学習として、遠山茂樹の1957年の「歴史の方法論的取扱」に掲載されている歴史教育の方法を紹介し、その中で「その史実を他の史実と関連させ、総合的に発展的に理解することや「異なった性質ものをつき合わせ比較する」といった過程が重要とし、事実認識や事実と事実のつながりである関係認識を正しく捉えることが大切であると指摘している。これらのことから、問題解決的な学習には、同一の歴史事象に関して異なる立場から追究し、それらを対比し関係づけることが重要である。

ところで、小学生はそのほとんどが歴史を初めて学習する。なかには歴史に興味があり様々なメディアから情報を得て歴史に詳しい児童もいて、個々の歴史認識に大きな違いがあるといえる。このような状況にお

いて、授業で児童が学習に必要な情報をインターネットで入手し、それをまとめ表現する学習が行われているが、その時間は相当なものになる。限られた授業時間内で児童が入手した情報を各自が読み取り、他との共通点や相違点を理解し、それらを基にして学習問題を解決しようと話し合うまでにはなかなか到達できない。到来する知識基盤社会化やグローバル化に対応するために、インターネットの使用に傾斜し過ぎて、収集した情報の吟味がおざなりなることが危惧される。それどころか、検索により他者の考えた知識を入手するだけで問題解決したつもりにも陥ることも考えられる。

問題解決的な学習は、単に学習問題の解答を見つけることではない。遠山の述べるように事象と事象のつながりから関係認識を捉えさせるための解決過程が大切であり、それが児童の社会的な見方や考え方を育むと考える。そのためには、1)歴史上の人物の業績とその行動理由とを関係づけて理解すること、2)様々な歴史的事象からその時代の岐路となるような出来事に対して複数の人物が関わる場面を設定し、各人物の立場から多面的に考えさせることが必要であると考えられる。

また、情報提示については、問題解決に必要な情報は児童任せにするのではなく、教師が精選し適切に提示をしたり、視点を与えて調べさせたりすることが大切であると考えられる。

以上のことから、本研究では、筆者が学級担任として過去に行った問題解決的な学習の実践を基に、どのような指導の手立てが児童に関係認識をもたせるのに有効であったかを検討することを目的とする。

2. 歴史学習に関する基本的な考え方

問題解決的な学習活動では、歴史的事象を単なる史実として捉えるだけでなく、関係認識を捉えさせる授業を展開することが大切である。そのために、歴史学習で取り上げる教材を吟味し焦点化する。そして、多面的な見方や考え方ができるような複数の歴史上の人物の提示、そして、登場した人物の行動理由に視点を当てた授業展開を行うことにする。詳細は以下に述べる。

(1) 「時代の岐路となる事件」を教材化する

歴史上の中心人物が関わった歴史的な事件にスポットを当て教材化する。その事件とは、時代が変化したり変化を始めた原因やきっかけとなる歴史的事象である(Table 1 参照)。これを「時代の岐路となる事件」と定義する。教材化する際には、その事件に対して中心人物やそれに関わった人物の働きが具体的に理解できる工夫を行う。

Table 1 「時代の岐路となる事件」の例

| 事件 | 中心人物 | 他の人物 |
|---------|------|---------|
| 大仏建立 | 聖武天皇 | 農民, 僧行基 |
| 元寇 | 北条時宗 | 御家人 |
| 島原の乱 | 徳川家光 | キリシタン |
| モリソン号事件 | 渡辺崋山 | 幕府, 将軍 |
| 日米安保条約 | 吉田茂 | アメリカ政府 |

(2) 中心人物と異なる立場の人物を取り上げる

時代を動かしたのは当時の中心人物だけでない。中心人物以外で「時代の岐路となる事件」に関わった人々がいるはずである。中心人物に影響を及ぼしたり、支えたり、あるいは、立ち向かったりした人物を取り上げ、その人物の立場で「時代の岐路となる事件」事件について捉え直しをさせる。この活動を通してこそ、児童は歴史事象を多面的に考えることができるようになると思われる。

(3) 人物の行動理由を考えさせる

「時代の岐路となる事件」を調べていくと、それに関わった人物が悩みながらも決断した理由があるはずである。それは時代の背景や要因、人物の願いなどが関係すると考えられる。そこで、人物の行動理由を児童に具体的に捉えさせることによって、「この人物はこんな理由でこう考えているはずだ」とその人物の行動理由を根拠にして歴史事象を考えることができると考える。

(4) 情報の提示

児童の興味に任せてインターネットで検索したり網羅的に調べたりしても、必ずしも問題解決に活用できる情報や知識になるとはいえない。児童が問題を追究するために知りたいと思う状況に合わせて調べさせたり、資料を提示したりすることが効果的である。また、個々の歴史認識に差がある場合は、歴史事象を追究する上で必要になる情報を与え、学級全員で共有する。

3. 実践1「聖武天皇と奈良の大仏」

(1) 実践の目標

本実践では、聖武天皇の強大な力に気付かせ、当時は天皇中心の時代で仏教思想による政治が行われていたことを理解させることを目標にした。「時代の岐路となる事件」として大仏造営を、その事件に関わる人物として聖武天皇と農民、行基を取り上げる。そして、各人物の行動理由を基に学習問題について話し合う過

程で大仏造営が当時の世の中に与えた影響について考えさせる。

(2) 授業の流れと児童の姿

<学習問題づくりの場面>

第1時では、学習問題づくりを行った。児童とともに、ダンボールで大仏と同じ大きさの目、口、鼻を作り、教室内に張り付けた。修学旅行で実際に大仏を見たことがある児童だが、至近距離から大仏の模型を見て、その大きさに目を見張っていた。

次に、資料集を活用して大仏の作り方を調べ、すべての児童が情報を共有した。この情報を基に疑問に思ったことや調べたいと思うことを出し合って、まとめたところ「聖武天皇は何のために大仏を作ったのだろうか」という学習問題ができた。

<聖武天皇の行動理由をつかむ場面>

第2時以降は、学習問題の予想をする。まず、天皇の願いの大きさが仏像の大きさに表れることに気付かせようと考え、大仏より小さい約2.5mの薬師如来座像の写真を提示し、「この大きさの仏像を作るのではいけなかったのかな」と尋ねた。すると、児童は天皇が何かを願っているのではないだろうかという予想をし、次のような発言が出された。

C1: 大きい方が願い事を聞いてくれそう。

C2: 聖武天皇が作ろうと思ったのなら、その理がある。

C3: 大仏だから大きな願いがある。

聖武天皇が何を願っているかを歴史年表で調べさせたところ、当時の出来事を発見し、「天然痘をなくすためだ」とか「争いやききんもあったから大仏を作ってそれをなくした」と、聖武天皇の大体の行動理由をつかむことができた。

<農民の行動理由をつかむ場面>

農民の立場から大仏造営の意味を考えさせるために、貧窮問答歌を提示し農民の生活の様子を話し合った。児童は農民の暮らしぶりから、天皇の命令に対して次の意見が出された。

C4: 生活が苦しいのにまた苦しくなる。

C5: 僕ならどこかへ逃げていく。

C6: 天皇は農民のことなんか全然考えていないひどい人だ。

このようなネガティブな発言が他にも多く出された。ここで、大仏が完成している事実から大仏造営に協力した農民の気持ちについて想像させた。

C7: 天皇の命令だから仕方なしに働いたんだ。

C8: 逃げても家族が困るから働いた。

C9: ひょっとして願い事が叶うかもしれないと言いついて聞かせて働いた。

C7, C8 のような発言が出されて、児童の大半は大

仏造営の意味をマイナスイメージで捉えていた。一部にC9のように大仏の力を信じて働いた農民もいた発言もあったが、この時点では大仏造営に対する農民の行動理由は抵抗できないから、しかたなしに働いたという理解が多かった。

<僧行基の行動理由をつかむ場面>

そこで、聖武天皇と農民をつなぐ役割を果たしたといわれる行基を児童に提示し、資料集で行基について調べさせた。行基は全国を歩いて仏を信じれば幸せになれるという教えを広めた僧であること、その教えを信じて進んで寄付をした、大仏作りを手伝う人がいたことを調べ、発表し合うことで情報を共有した。そして、大仏造営の意味について話し合ったところ、児童の発言に変化が見られた。

C10: みんな苦しいけど、行基の言うように大仏を信じれば少しは良くなっていくと思う。

C11: 葉なんかないと思うから、当時の人は大仏を作ると幸せになれると思った。

C12: 本当はどうにもならなかったのではないかな。

C13: 大仏が作られたのは日本中の人が協力したからだと思う。

C14: だから平和な世の中になっていったんじゃないかな。

このように、天皇の命令だから仕方なしに農民は働いたという考えから、C11のように、医学や科学が未発達の際には、聖武天皇は大仏の力を信じて幸せを願ったとの考えや、C13, C14のように、多くの農民が仏の力を信じて協力したとの考えに変化してきた。行基の影響により多くの人々が大仏造営に関わってきたことを多面的に捉えることができたと考えられる。

4. 実践2「移り変わる世の中と渡辺華山」

(1) 実践の目標

本実践は、西洋事情に通じた蘭学者たちが鎖国を頑なに続ける幕府の政策を批判するようになり、武士政治が揺らいでいった幕末の様子を理解させることが目標である。中心人物として蘭学者渡辺華山を、「時代の岐路となる事件」としてモリソン号事件を取り上げる。この事件とは日本人の漂流人を乗せた外国船モリソン号が、漂流民送還と通商要求を目指し浦賀に入港したが、幕府は異国船打払令を盾に砲撃を加え追い返した事件である。学級全体で問題を解決するための基本的な知識として、モリソン号事件を理解させ、これに砲撃を加えた幕府の行動理由と幕府の対応を批判した華山の行動理由をつかませる。その上でモリソン号事件について話し合う過程を通して蘭学者など様々な人々の働きによって我が国が開国へと進んでいくことを理解させる。

(2) 授業の流れと児童の姿

<渡辺崋山に出会わせる場面>

第1時では、一揆や打ちこわしが多発していた時代の様子を児童に教えた。第2時では、ビデオや伝記を活用して、崋山は、「尚歯会」という研究所で蘭学を学び、西洋事情に通じていることから西洋の大砲の威力や航海術、思想などが進んでいることを崋山が知っていることに気づかせた。さらに「報民倉」と言う米蔵を自費で作り、飢饉を乗り切ったことから崋山の人間性に触れさせた。こうして崋山についての情報の共有をさせた。

<幕府の行動理由をつかむ場面>

第3時では、幕府は日本にきたモリソン号に対してなぜ打ち払ったかという幕府の行動理由を考えさせる。モリソン号が漂流民送還と通商を目的に浦賀に來航したことを資料で知らせ、幕府の対応を予想させた。

T1: 幕府はモリソン号を入港させるかな

C15: 鎖国しているから入港させないと思います

T2: 日本人の漂流民を送ってきたんだよ

C16: 鎖国は日本人でも入れないから断ると思います

C17: その人がキリスト教を広めるかもしれないから駄目です

T3: 断ると思う人はどれくらい?

ほとんど全員挙手

T4: モリソン号が言うことを聞かなかったらどうするのでしょうか

C18: やっつけるぞと言って追い返す

C19: 攻撃してやる

このようにモリソン号を入港させないのは、C15、C16、C17のように鎖国という幕府の行動理由を児童は確認することができた。

<渡辺崋山の行動理由をつかむ場面>

数年後、幕府の砲撃によって追い返されたモリソン号が再度日本に行くことを知らせた。そして幕府の行動を予想させたところ、全員が攻撃するとの意見であった。崋山の行動理由を考えさせるために、モリソン号に攻撃を加えようとする幕府に、崋山ならどうするかを考えさせた。すると、多くの児童は、西洋との技術の差を行動理由にあげ、戦争になったら日本が必ず負ける。だから打ち払うのはやめた方が良くという考えであった。その中で具体的な方法を書いていた児童の考えは次に示す通りであった。

鎖国をやめた方が良く: 9名

西洋の国と話し合う: 5名

西洋の国と仲良くする: 3名

鎖国はやめてキリスト教は禁止: 2名

これらの意見から児童はモリソン号事件に対する崋山の行動理由がつかめたと考える。

<学習問題づくりの場面>

次は、崋山はどのように幕府を説得して砲撃を止めさせるかを予想させたところ、幕府に訴えに行く、手紙を書くなどの意見が出された。幕府は権威的ではあるが西洋の事情を知らない。そのような幕府に対してどう進言するかという助言をしつつ、「崋山は、幕府にどのように進言したのだろうか」という学習問題を作らせた。

<幕府に進言する崋山を想定した話し合い場面>

学習問題を解決するために、児童は崋山の立場で幕府に進言する。教師は将軍の立場で児童の発言を切り返すといった討論を行った。

C20: なぜ、打ち払いをやめないのですか。

T5: キリスト教を禁止するために鎖国をした。したがって外国船は攻撃しても追い返す。

C21: モリソン号を攻撃したら反対に日本がやられてしまうのではないですか。

T6: なぜやられてしまうと言えるのだ。日本には大きな大砲がある。

C22: 西洋の技術を知らないんですね。とてもかまいません。

C23: 西洋と仲良くしてもっと勉強して下さい。

T7: 幕府は鎖国をしているから仲良くはできない。

C24: では鎖国をやめたらいいのではないですか。

T8: 鎖国したのはキリスト教を禁止したからだ。

C25: ではキリスト教だけ広めないように頼んだらどうですか。

T9: また、かくれキリシタンが出てくる。

C22 のように進んだ西洋の技術を述べる発言や、C25 の折衷案が出るが、なかなか権威的な将軍を説得することができず、学習問題が解決できなかった。

そこで、実際の崋山の行動を知らせるために、彼の書いた「慎機論」を資料として与えた。これは児童が欲しい情報であったため、積極的に調べる様子が見られた。その資料にはすでに西洋に占領された国があることを理由に海の守りを固めることが書かれていた。その後、崋山は幕府批判をしたわけではないのに、慎機論によって処罰された事を知らせたところ、児童は次の感想を述べた。

C26: 幕府がこのままだと日本は西洋の領土になってしまう。

C27: 日本は鎖国をしているので救援を出しても他の国に集まって助けてもらえない。

C28: そのうち崋山の言うことを聞かなくて幕府は後悔する。

学習問題については、C28 の発言のように、幕府は

華山の進言を受け入れなかったらしいことは理解できたが、すっきり解決できたわけではなかったことは課題である。

その後の出来事を年表で調べさせることにより、外国の圧力に屈して開国し、幕府は倒れることになったことに気付き、児童は幕末の時代の様子を理解することができたと考える。

5. 考察

本実践では、学習する時代の様々な歴史事象から授業の中心に「時代の岐路となる事件」を位置づけた。その結果、児童はその時代の大体のイメージを捉えることができ、この点では小学校の歴史学習には適していたと考える。

また、複数の人物を取り上げた結果、同一の事件を多面的に捉えさせるのに有効であったといえる。大仏造営では、聖武天皇と農民、行基を取り上げ、モリソン号事件では、幕府や将軍、渡辺華山を取り上げた。為政者や時代の中心人物とは異なる立場に立って歴史事象を考えさせることができたと考える。その際、人物の行動理由をつかませたことにより、その人物の働きを根拠づけて発言したり考えたりする児童が多くなった。また、事件に対する人物の行動を予想することもできた。例えば、「幕府は鎖国を理由にしてモリソン号に砲撃を加えるだろう」「西洋の技術力を知っている華山は砲撃を中止させると思う」などの発言である。児童なりに根拠をもって予想を深めると、その事実を確かめようと進んで調べる姿も見られた。歴史学習において、人物の行動理由をつかむことによって、根拠をもって歴史事象を追究しようとする態度を育てるのに有効な指導の手立てになったと考える。

このように、「時代の岐路となる事件」に関わった複数の人物とその行動理由をセットにすることにより、児童は複数の人物が互いに関係をもちながら歴史が造られたという関係を理解することができたと考える。そのため、史実を単なる歴史認識として理解するのではなく、史実と史実のつながりやそれらの因果関係が理解でき、史実を関係認識として理解できる児童を育成するのに有効であったと考える。

情報の共有については、個々に歴史認識に差がある場合は教師が意図的に情報や資料を提示することが必要であった。モリソン号事件は地域の素材を教材化したことから、渡辺華山の業績や人柄などが分かる資料を教師の側から提示し、知識を与えた。同じレベルの歴史認識をもったため、個々の児童の感じ方や解釈の違いを学級全員で話し合うことができたと考える。

最後に、本実践は学習問題として「聖武天皇は何のために大仏を作ったのだろうか」「華山は、幕府にど

のように進言したのだろうか」を児童とともに作成し、これを解決する問題解決的な学習を展開してきた。しかし、前者では聖武天皇の行動理由に気付いたことにより単元の半ばで解決してしまう展開になった。後者では幕府は進言を受け入れないという解答であったので、児童にとってわかりにくい学習問題になってしまった。歴史事象を児童が意欲的に追究できる学習問題であれば、必ずしも単元を通すものではなくても許容されると考えるが、学習問題の内容や単元内の位置づけについては今後の研究課題としたい。

引用文献

宮原武夫(2006). 初期社会科と問題解決学習 じっさよう地歴・公民科資料, 実務出版 No.62 pp.6-9.

文部科学省(1997). 21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(中央教育審議会第二次答申(全文)) 1997平成9年6月1日 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309655.htm

文部科学省(2008). 小学校学習指導要領解説社会科編 東洋館出版社

文部科学省(2016). 教育課程企画特別部会の「論点整理」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf

The Problem Solving-Like Elementary School Learning of Social Studies
which Makes to Have the Relationship Recognition :
Through the Practice which Addressed a Viewpoint to "The Event which
Becomes a Crossroads in the Age" and Aimed at Person's Behavior
Reason.

Nobumi MIYATA

Aichi Mizuho College

Abstract

The purpose of this research is to consider whether children can catch a historical phenomenon multilaterally by this problem solving-like learning. So I take up "the event which becomes a crossroads in the age". I made sure that a behavior reason of the figure about the event can be understood.

As a result, when children thought and expected behavior of the figure about the event, a behavior reason was a basis, and that was effective means by a problem solving situation. Children could recognize that history was made with to consider this event at the viewpoint of more than one person though the respective persons concerned each other. That these means are effective to make children have relationship recognition became clear.

key words : problem solving-like learning, history learning, elementary school,
relationship recognition